

本院で体外受精を予定している女性が、体外受精させた受精卵の染色体を調べる「着床前スクリーニング」検査を受けるためにアメリカに受精卵を輸送する計画をたてています。いい受精卵（染色体に異常ない）を選択して胚移植をしたいと考えているようです。流産を繰り返す人たちの妊娠率を上げる可能性があること注目されていますが、日本では「命の選別につながりかねない」と学会は認めていません。しかし海外では行われているのでその女性もアメリカに送るという選択をしました。男女の生み分けのため東南アジアで体外受精して、希望の性のしかも染色体に異常がない赤ちゃんを妊娠するケースも着床前スクリーニングを利用しています。検査法は従来 FISH 法という技術でしたが最近ではアレイ CGH 法で DNA を機械で読み取る方法が主流です。

流産の原因は染色体の構造異常だけでなく、数の異常が大きく関係していると考えられているのでこのような受精卵をスクリーニングすることで流産率を低下させ妊娠率を上げられる可能性があるのです。不育症で何回も流産し辛い思いをしている人には認めてもいいのではと思いますが、はたしてそれだけではすまないのも現実ありうるでしょう。リスクのない人の染色体検査や、性別の選択も当然発生することが予想されるとしたら命の選別につながるのです。生殖現象には自然淘汰がつきものです。着床前スクリーニングによって、社会的に何かが変わるはずもないのですが、何をしてもいいというわけにはいかないのも事実です。

「生殖医療と倫理」は課題が山積しているのに、遅々としかすすまないのはやはり仕方がないことでしょうか。

皆さんも考えてみて下さい。

着床前スクリーニングの流れ

